

清初における楊廷樞について

滝野 邦雄

はじめに

錢肅潤¹⁾は、『南忠紀』(順治七年四月十五日(西暦一六五〇年五月十五日)自序)の「解元楊公」条において、楊廷樞(字は維斗、号は復庵・古柏軒・皋里先生。江蘇吳縣の人。萬曆二十三年(一五九五)～順治四年(一六四七年)。崇禎三年(一六三〇)庚午應天鄉試の解元)についてつぎのようなコメントを書いている。

錢子(錢肅潤)曰く、公(楊廷樞)諸生爲りし時に周忠介(周順昌)の難に遇い、即ち身を奮いて(奮身:力の限りを尽くす)顧みず、正言し以て當時(當時の人たち)に告ぐ。而して當時も亦た之を敬畏(心から尊敬)す。嗣後、復社興り、海内の盟主と爲る。天下の風采を望む者、皆な楊先生(楊廷樞)に見ゆるを得るを以て幸と爲す。而して立身大節は、乃ち末後に見ること此の如し。嗚呼、楊公(楊廷樞)の如き者は、眞に我が明の一人なり(『南忠紀』一卷・「解元楊公」条・中華書局一九五九年出版鉛印本『晚明史料叢書』所収・百四十八頁)。

蘇州の楊廷樞は、諸生であった時に周順昌の逮捕に端を発する開讀の變があり、力の限りを尽くし、遠慮なく直言して当時の人々に告発した。そのため人々も心から尊敬した。後に復社が設立されると、楊廷樞は天下の盟主となる。文章の才能を認めてもらうことを願う者は、みんな楊廷樞にお目にかかれることを幸いとした。楊廷樞の処世の気概は、その最後に「絶命辭」にあらわされている。楊廷樞のような人物は、ほんとうにわが明朝の人である、という。

楊廷樞は、剛直な性格から尊敬されたうえ、八股文の名手として崇拝された人物であった。また、清政権によって逮捕されると、自分の気概を表わす「絶命辭」を書き、処刑された、というのである。

清政権による江南支配が始まった時、当時の江南の人々は楊廷樞が反清運動に参加するであ

1) 光緒『無錫金匱縣志』は、錢肅潤を、つぎのように伝える。

錢肅潤、字は礎曰。幼きより鄒期相に従學す。[鄒]期相は、故より高攀龍の弟子なり。授くるに靜坐法を以てし、頗る得る得り。既にして博士弟子員に補せらる。鼎革の後、棄去隱居して教授す。當事(権力者)其の衣冠の異なり有るを見て、執(とら)えて之に咎(とが)うちて、脛を折る。[錢]肅潤笑いて曰く、「變は一足なり。庸何ぞ傷まん(『左傳』文公十八年に「人奪汝妻而不怒、一挾汝、庸何傷(人汝の妻を奪い、而して怒らず。一たび汝を挾つ、庸何ぞ傷まん)」)」。と。因りて自から「跛足生」と號す。此れより名益々高し。四方の學者尊びて「東林の老都講(都講:授業を輔佐する儒生)」と爲す。年八十八にして家に卒す(光緒『無錫金匱縣志』卷二十一・儒林・明・「錢肅潤」条・二十四葉)。

ろうと考えた。だが実際は、書簡のやり取りを通じて反清運動にかかわっていたと推測できるが、福王政権の崩壊後の各地でおこった政権に参加することもなかったし、蘇州内外での反清運動に積極的にかかわることもなく、ただ蘇州郊外に避難していただけであった。ところが、順治四年四月に逮捕され、処刑される。

では、なぜ人々は楊廷樞が反清運動にかかわるであろうと考えたのだろうか。本稿では、そのことを考えるために、まず自己の節義にたいする見解を示す楊廷樞の八股文を検討する。そして、清初期の楊廷樞の動向や、その逮捕と「絶命辭」などを検討してみたい。

なお、楊廷樞の事跡としては、つぎのようなことが挙げられる。

◎天啓六年（一六二六）に周順昌が宦官派に逮捕されることに端を発する開讀の變があり、楊廷樞は、みずから対策を講じようとして、禍を被りそうになる。

◎崇禎三年（一六三〇）の郷試で解元となる。文章と気節で名望を得て、應社を蘇州に提唱し、經書によって八股文を書き、門人が多かった。

◎「南都防亂揭」で阮大鍼を攻撃。そのため、福王政権下で疑獄事件に巻き込まれそうになる。

◎順治二年（一六四五）以後、蘇州郊外の鄧尉山に隱棲したものの、門人が反清運動にかかわったため連座して逮捕される。護送される舟中で「絶命辭」十二首を書き処刑される。

(1) 八股文

楊廷樞の八股文は、清朝初期にはどのように評価されていたのであろうか。俞長城（字は寧世、号は碩園。浙江桐郷の人。康熙二十四年乙丑科（一六八五）三甲五名の進士）は、つぎのように述べる。

魏璫（魏忠賢）用事（権力を握る）し、緹騎（特務機関である錦衣衛・東廠・西廠の属員）

四出す。長洲の周忠介（周順昌）逮（逮捕）され、吳民 譁然（騒然）たり。楊維斗（楊廷樞）諸生を率い、先ず官吏を撃殺す。中旨（宮中より宦官が伝達する天子の勅意）もて顔佩韋等五人の效死（命をかけて尽力する）を詰問するに及び、維斗（楊廷樞）は黜に止まる。何ぞ仗義（正義を堅持する）の勇に始まり、何ぞ畏罪（刑罰を恐れる）の怯に終わるや。夫れ季布²⁾ 奴と爲り、張讓^{ママ①} 亡命す。〔それは〕苟も免れるに非ざるなり。「誠に其の死するを重んずるのみ」（『史記』季布傳・論贊）。維斗（楊廷樞）庚午（崇禎三年：一六三〇年）に賢書（合格者の掲示）に薦めらる。館閣 争いて之を門下に致さんと欲す。不遇に終わると雖も、名籍 甚だし。文は直ちに守溪（王鏊）を追い、唐（唐順之）・瞿（瞿景淳）以下の蔑如（及ばない）と爲すなり。錢吉士（錢禧）と偕に『同文錄』を選す。一代の風氣 其の論定なり。吉士（錢禧）兵に死し³⁾、維斗（楊廷樞）も亦た相い繼ぎて没す。上は君に負かず、下は友に負かざる者と謂う可し。然る後に向の五人の難に死せざ

る者は、彼 固より待つ所有りて以て名を天下に成さんと欲するを知るなり（俞長城「題楊維斗稿」『可儀堂一百二十名家制義』卷之三十四・二葉～三葉・「楊維斗稿」条）。

- ①「張讓」は、後漢末の評判の芳しくない宦官で、亡命したことはない。ここは、司馬遷が、「豫讓は義もて二心を爲さず」（『史記』太史公自序）といい、「士は己を知る者の爲に死し、女は己を説ぶ者の爲に容る（化粧する）」（『史記』刺客列伝）の言葉で有名な「予讓」の誤字の可能性が考えられる。

魏忠賢が権力を握り、緹騎（特務機関である錦衣衛・東廠・西廠の属員）が四方に派遣された。人望のあった長洲の周順昌が逮捕され、蘇州の人々は騒然となった。楊廷樞は、諸生を率いて、先ず官吏を撃ち倒した。中旨（宮中より宦官が伝達する天子の勅意）が出されて、顔佩韋など五人の命がけの行為が詰問されたのに、楊廷樞は黜（放逐）に止まった。では楊廷樞は、どうして正義を堅持する勇氣に始まり、どうして処刑を恐れておどおどすることに終わったのだろうか。そもそも、季布は生き延びるために奴隷にまで身を落とし、張讓（予讓）は亡命した。それは一時逃れではない。「自分の死に対処する態度を重要と考えた」からである。楊廷樞は崇禎三年庚午科の郷試に中式する。高官たちは、競って門下生としたいと望んだ。進士にはなれなかったが、たいへんな名声があった。その八股文は、八股文の大成者として有名な王鏊にせまり、名手として名高い唐順之・瞿景淳などは楊廷樞に及びもしなかった。錢禧といっしょに八股文の選集である『同文錄』を編纂した。当時の八股文作成の風潮は、楊廷樞の定めたものである。錢禧は、兵乱で亡くなり、楊廷樞も続いて亡くなった。上は君の期待を裏切らず、下は友の期待を裏切らない人物であったと言うべきである。そうすると、先に周順昌が逮捕され、五人の殉難者が出た時に楊廷樞が死ななかったのは、時期を待って、名前を天下に輝かそうとしたかったことが分かるのである、という。

- ✓ 2) 季布は、項羽の將軍として劉邦を苦しめた。そのため、項羽が滅ぼされると、多額の賞金がかけられたものの奴隷に身を落として逃げのびる。後に赦されて漢の有能な將軍となる。『史記』季布傳・論贊は、つぎのように述べる。

太史公 曰く、項羽の氣（はげしい気性）を以て、而して季布 勇を以て〔名前を〕楚に顯わす。身屢しば軍を典り、旗を率ること數しばなり、壯士と謂う可し。然れども刑戮を被るに至り、人の奴と爲りて死せず、何ぞ其れ下らんや。彼れ必ず自ら其の材を負む、故に辱を受けるも羞とせず、其の未だ足らざるを用いる所有らんと欲するなり。故に終に漢の名將と爲る。賢者 誠に其の死するを重んず。夫れ婢妾賤人の感慨（一時の激情）にして自殺する者は、能く勇なるに非ざるなり、其の計畫 之を復する無きのみ（『史記』季布傳・論贊）。

- 3) 『吳城日記』によれば、錢禧は、避難先の寶華山で人々を苦しめたため、順治二年七月に人々の手に斃れた、という。

吳の庠生の錢吉士、名は禧、頗る文譽（文名）有り。子も亦た童年にして入泮（生員となる）す。數載前、寶華山の郷間に卜居（地を選んで転居する）す。然れども郷曲を凌轢（勢力をたのんで威圧する）し、積怨 日々久し。茲の亂に乗じて、民 聚まりて其の家を眾打す。蓄貲を搶散（搶奪して散ず）して、器皿を撃毀（打ち壊す）し、火を縦ちて之を焚く。吉士（錢禧）を執え、烈焰の中に投げんとす。子忍びざるに因り、出でて叩求し、父の死するを免れんことを冀うも、併せて其の身を喪い、父子 俱に群凶の手に斃る（『吳城日記』卷上・「順治二年七月」条・二百十四頁～二百十五頁）。

八股文の大成者の王鏊にせまり、名手の唐順之・瞿景淳などは及びもしなかったというのであるから、俞長城は楊廷樞の八股文をかなり高く評価していたようである。

そもそも、明末の天啓・崇禎年間の八股文は、どのような傾向を持っていたのであろうか。清の方苞（字は靈臯，晩年に望溪と号す。安徽桐城の人。康熙七年〔一六六八〕～乾隆十四年〔一七四九〕）は乾隆四年（一七三九）四月初三日に提出した「欽定四書文選 凡例」で、明末の天啓・崇禎年間の八股文を次のように評論する。

明人の制義（八股文），體 凡そ屢しば變ず……〔天〕啓（一六二一年～一六二七年）・〔崇〕禎（一六二八年～一六四四年）の諸家に至れば，則ち「思^ういを窮め精を畢くし」（韓愈「潮州刺史謝上表」），務めて奇特（特別）を爲し，載籍（經書）を包絡（包括）し，物情（時事）を刻雕（刻み込み）す。凡そ胸中の言わんと欲する所の者は，皆な題に借りて之を發す。其の善に就く者は，興す可く觀る可し。〔こうした〕光氣（風潮・氣風） 自ずから^{ほろぼ}泯す可からず……（『進四書文選表』『欽定四書文』凡例・一葉）。

明の天啓・崇禎年間の八股文の作者になると，思いのたけを尽くして精魂をはきだし，つとめて普通でないものを書く。そして經書を包みこんで，時事問題について書き込む。すべての胸中の言わんと欲するものは，題目に借りて書き入れる。その善いものは評価すべきだし，参照すべきである。その氣風は否定すべきではない，という。天啓・崇禎年間の八股文は，題目にかこつけて，自己の意見を主張する傾向があったというのである。

これから，検討する『歷科小題澄原前集』に収められた楊廷樞の「臨大節而不可奪也」題もこうした傾向を持っている。

『歷科小題澄原前集』の編者である鄒震謙（字は，乾一。江蘇太倉の人。清初の貢生）によると，この八股文は，楊廷樞が若いときに書かれたものであるけれども，忠義が天性から出ているのを感じさせるものであると評する。

……此の文は先生（楊廷樞）の髫年（幼年）の作る所と為すも，忠義の性 實に夙稟（天性）の然らしむるに由るを見る。倉卒の間に能く強いて致すに非ざるなり。鄒乾一^①（道光三年（一八二三）二月重鐫（康熙十七年：一六七八年序）『歷科小題澄原前集』兩論・一百六葉・「臨大節而不可奪也 楊廷樞」条）。

①鄒震謙，字は乾一。嘉慶『直隸太倉州志』（卷三十六・人物・文學二・太倉州・國朝・「鄒以敬」条・十八葉）に「國初貢生鄒震謙」。

題目は、『論語』泰伯の太字で示した個所である。

曾子曰，可以託六尺之孤，可以寄百里之命，臨大節而不可奪也，君子人與，君子人也（曾子曰く，以て六尺の孤を託す可く，以て百里の命を寄す可く，大節に臨みて奪う可からず，君子人なるか，君子人なり）

〔朱注〕與平聲○其才可以輔幼君攝國政，其節至於死生之際而不可奪。可謂君子矣。與，疑辭「也」，決辭。設為問答，所以深著其必然也○程子曰，節操如是，可謂君子矣（其

の才 以て幼君を輔けて國政を攝す可く、其の節 死生の際に至りても奪う可からず。君子と謂う可し。「與」は、疑うの辭。「也」は、決するの辭。問答を設爲すは、深く其の必然を著わす所以なり○程子 曰く、節操 ^{かく} 是の如ければ君子と謂う可し、と)

張居正(字は叔大、号は太岳、諡は文忠。江陵の人。嘉靖四年〔一五二五〕～萬曆十年〔一五八二〕。嘉靖二十六年〔一五四七年〕丁未科二甲九名の進士)の名が付される『四書直解』⁴⁾では、この『論語』泰伯を次のように理解している。

「託」は是れ付託。「六尺之孤」は是れ幼君。「寄」も也た是れ付託の意志。「百里」は是れ侯國。「命」は是れ政令。「大節」は是れ大關係の處。「與」は是れ疑詞。「也」は決詞。曾子 [以下のように] 説けり。天下の德(を成す)を言う者は、君子に期す。然れども「才」とは德の用、「節」とは德の守なり。二者 兼ね備(備)わり、而して後に德の成ると爲すなり。若し[そのような]人の此に有れば、但だ長君(年長の君主)を輔するのみならず、顧命(君主の遺詔)を親受し、六尺の幼冲の君を把^もって他^{かれ}に付託すと雖も、亦た以て承受(引き受ける)して之を輔佐す可し。既にして能く其の國家を保衛し、而して又能く其の令德(めでたい德)を養成(身につける)す。但だ國政を共にするのみならず、侯國 君無く、一國の政令を把^もって委ねて他^{かれ}に寄與すと雖も、亦た以て擔當して之を總攝す可し。既にして能く其の社稷を安定し、而して又能く其の民人を撫輯(安んじ睦まじくさせる)す。其の才の人を過ぐる事此の如し。事變の來る・國勢(國家の狀況)の倉皇(慌てふためく)、人心 搖動し、其の從違(従ったり離れたり)して趣かに避くは、乃ち「大節」の関する所なり。其の人 此の時に臨み、幼君を輔し、國政を攝^とる所以の者は、卓乎として理の精明に見われ、確乎として志の堅定を持すればなり。惟だ義の當に然るべき所を以て主(拠りどころ)と爲すのみ。議論 紛沓なりと雖も、終に揺れる能わず。死生の前に在りと雖も、亦た其の節の人に過ぐるを奪う能わざること、又た此の如し。此の若き人は、果たして之を「君子」と謂う可くんば、吾 既に其の「才」有り、又た其の「節」有るを知る。信に「君子」に非ざれば、能わざるなり。然らば是の人なるや、學ぶ者より

4) 『四書直解』は、『中國古籍善本書目』(經部・三三二頁～三三三頁)に明代の七種類の刊本が著録されている。また、清代には禁書にもなっていないが、『四庫全書總目提要』には取り上げられていない。『四書』を直解しただけのまったく価値のない書物と考えられたためであろうか。『續修四庫全書總目提要』が編纂されて、ようやく解題が書かれる。その解題を担当した倫明は、次のように述べる。

明の張居正撰。〔張〕居正 講官と爲りし時、〔『四書直解』を著し進呈す〕(徐乾學「四書集註直解序」)。其の書「先ず四書章句を標舉して綱と爲し、朱註を次にし、直解を次にす」(同上)。「句ごとに擲^{なら}べ字ごとに比^べべ」(同上)、大都 平實なり。康熙丁巳(康熙十六年〔一六七七年〕)、徐乾學 是の書を重刊するに、又た吳郡の「顧夢麟の『說約』原文を取り、細字を以て其の上に纂^{あつ}む」(同上)。卷首に徐乾學の序有り^①、〔張〕居正の「進講章疏」を附す。又た「四書直解看書法」を附するも、甚だ淺陋なり。何れの人の作なるかを知らざるなり(『續修四庫全書總目提要』經部・四書類・「四書集註莫解說約七卷」条)。

①徐乾學の文集である『倦園集』には、この序文は収められていない。

なお、拙稿では、康熙十八年(一六七九)序・醉畊堂刻『重刻張閣老經筵四書直解』を用いる。

言えば則ち「君子」と爲し、國家より言えば則ち所謂ゆる「社稷の臣」なる者なり。人君人をを用うるに「才」・「節」兼備の君子に非ざれば、以て輕がろしく授く可からざるなり（康熙十八年（一六七九）序・醉畊堂刻『重刻張閣老經筵四書直解』論語・卷七・「曾子曰可以託六尺之孤可以寄百里之命臨大節而不可奪也君子人與君子人也」条・二十一葉～二十二葉）。

「託」とは付託,「六尺之孤」とは幼君のこと。「寄」もまた付託の意味である。「百里」とは侯國のこと。「命」とは政令のこと。「大節」は是れ大いに関係するところのこと。「與」は是れ疑問の語気の助詞で,「也」は決詞（確定の語気の助詞）である。曾子はつぎのように述べる。世間で徳が完成していることに言及するのは,「君子」に期待しているからである。しかし,「才」は徳の用で,「節」は徳の守である。二者が兼ね備わってはじめて徳が完成しているとなる。もしもそのような人がここにいたならば,年長の君主を輔佐するだけでない。君主が遺詔を授けて,幼少の君をその人物に委ねたとしても,引き受け了承して幼少の君を輔佐することができる。そうしてその国を防ぎ守り,幼少の君に令徳（めでたい徳）を身につけさせる。また,国政をともしに行なうだけでなく,その国に君主がいなくなり,一国の政治をその人物に託したとしても,責任を負って取り仕切ることができる。そうしてその国を安定させ,その民を安んじ睦まじくさせる。その才能の人々を越えていることは,このようなものである。重大な混乱が起こったり,國家の状況が差し迫ったり,人心が動揺したりする時,従ったり離れたりしてすみやかにそうした非常事態を抜け出るといえるのは,「大節」に関係することである。その能力のある人が,こうした事態になって,幼少の君を輔佐し,国政を行なえるのは,卓然として理の精明を知り,確乎として志が堅持しているからである。「義」のしかるべきものを拠りどころとしているからである。議論が多岐にわたって混乱しても,最後まで動揺することがない。死生を前にしても,その「節」の人に勝っていることを奪うことはできないのも,同じことである。こうした人が,「君子」というべきであれば,われわれは,すでにこのような人が「才」を持っており,「節」も持っていることがわかる。ほんとうに「君子」でなければそのようなものはないからである。それならば,このような人は,読書人たちからいうと「君子」であり,國家からいうと「社稷の臣」である。君主は,人をを用いるのに「才」と「節」とを兼備する君子でなければ,輕々しく実権を与えるべきではない,という。

おそらく楊廷樞もこの『論語』泰伯を,『四書直解』のように理解していたのであろう。そして,國家の非常事態に（「大節に臨みて」）,幼い君主を輔佐して,国政を担当できるのは（「奪う可からず」）は,「義」のしかるべきものを拠りどころとしているからであり,それは,「死生を前にしても,その「節」の人に勝っていることを奪うことはできないのは,同じである」というような立場から,その八股文を書いたのであろう。

では,楊廷樞の「臨大節而不可奪也」題文を検討してみたい。全文は,以下のようなものである。

人臣以節持天下，則不奪貴矣。

盖人臣不貴有大才，而貴有大節，其臨之而不奪也，其能持世者乎。

且甚矣，全軀保妻子之臣誤天下也，彼盖不知有節耳。夫人臣爲社稷争安危，爲國家争成敗胥恃節以持之而節豈不大哉。然而貪生重則愛國輕，畏死專則報主貳，求其不可奪者誰也。

有如

内擁藐孤而外控國命，此何時哉，

自國視之則大故也／，

自臣視之則大節也／，

一生之大忠大奸，每於危疑莫必時分其梗概／，

而萬世之大功大罪，亦於艱難紛集際定其權衡／，

故以人臣而臨以

有非常之權，庸有非常之望，保無爲亂世之奸雄變其節者乎，彼且曰，見利不顧其君，弗爲也，顧命之謂何，而因以爲利則以定策老臣，而扶委裘幼主，有屹然不可動者矣／，

有不世之功，必有不世之禍，保無以流言之疑忌揺其節者乎，彼且曰，臨難而忌其君，弗爲也，天下設不諱，先以身當之則以百鍊孤忠，而挽一錢國步，有稟然不可犯者矣／，

幸而多艱徐定宗社晏如，則正色以立朝，而人不敢謂發蒙振落，即死者復生，生者不愧而大節自著，足消天下内奸外寇之心／，

不幸而天心已去大命難留，則從容以就義，而國且恃爲一縷千鈞^②，即臣首可斷，臣心無二而大節彌光，亦足酬祖宗尊賢敬士之報／，

盖人臣受先王之厚託膺人國之重寄

微獨利不可趨且亦害之不可避／

微獨生不可苟生且亦死不可易／

死所以大節萬古不磨而仰爲不可奪之君子耳，吁天下寧無賴若臣哉（道光三年（一八二三）二月重鐫（康熙十七年（一六七八）原序）『歷科小題澄原前集』兩論・一百五葉・「臨大節而不可奪也 楊廷樞」条）。

①『漢書』司馬遷傳所収の「報任安少卿書」に「今舉事壹不當，而全軀保妻子之臣隨而媒孽其短，僕誠私心痛之（今 事を舉げて壹たび當らず（李陵が匈奴と戦い一度敗れる）して，而して軀を全うして妻

子を保んずる（楽に暮らして妻子を養っている）の臣、随って其の短を媒孽す（つぎつぎと罪を作り上げる）す。僕（司馬遷）誠に私に心に之を痛む」。

②『漢書』枚乘傳に「夫以一縷之任係千鈞之重，上縣無極之高，下垂不測之淵，雖甚愚之人猶知哀其將絕也（夫れ一縷の任を以て係千鈞の重し係く，上は無極の高さに縣（懸）り，下は不測の淵に垂る。〔それならば〕，甚だ愚なるの人と雖も，猶お其の將に絶えんとするを哀しむを知るなり）」。

破題で、「人臣 節を以て天下を持すれば、則ち貴きを奪わず」とこの八股文の主題を述べ、それを承題で「盖し人臣 貴からずして大才有り、貴きものは大節有れば、〔人臣は〕其れ之に臨むに奪わざるなり、其れ能く世を持する者なるか」と承ける。

そして起講で「且つ甚だしきなり、軀を全うして妻子を保んずるの臣の天下を誤つや、彼盖し節有るを知らざるのみ。夫れ人臣 社稷（国家）の爲に安危を争い、國家の爲に成敗を争う。胥節に恃みて以て之を持す、而らば節 豈に大ならざるや。然り而して貪生を重しとすれば則ち愛國は輕し、畏死を專にすれば則ち報主 貳あり、其の奪う可からざる者を求めるは誰ぞ」といい、この八股文の要点をまとめる。

こうして、提股で「如き有り／内に藐孤（幼弱の孤兒：『左傳』僖公九年）を擁し、而して外に國命（國家の政權）を控（おさえる）す、此れ何れの時なるや、／國より之を視れば則ち大故（國家の重大事）なり、／臣より之を視れば則ち大節なり、／一生の大忠・大奸、毎に危疑の必ずする莫きの時に於いて、其の梗概（剛直な氣概）を分かち、／而して萬世の大功・大罪、亦た艱難の紛集する際に於いて、其の權衡（法度）を定む」とする。

そして、中股で「故に人臣を以て臨むに以えらく／非常の権有れば、庸って非常の望有り、保ちて亂世の奸雄と為りて其の節を變ずる無き者なるか乎、彼れ且つ曰く、利を見て其の君を顧みず、爲さざるなり、顧命は之れ何を謂う、而して因りて以て利と爲せば則ち定策の老臣を以て、而して委裘（幼くして在位）する幼主を扶して、屹然として動く可からざる者有り、／不世（非凡）の功有れば、必ず不世（非凡）の禍有り、保ちて流言の疑忌を以て其の節を揺らぐこと無き者なるか、彼れ且つ曰く、難に臨みて其の君を忌む、爲さざるなり、天下設不諱、先ず身を以て之に當れば則ち百鍊（何度も鍛える）の孤忠（みずから堅持する忠貞）を以て、而して一錢（極少）の國歩（國家の命運）を挽き、稟然として犯す可からざる者有り」とする。

後股で「幸にして多艱 徐むるに定まり、宗社（国家） 晏如（安寧）たれば、則ち色を正して（厳肅な態度で：『書經』畢命に「色を正して下を率う」）以て朝に立つ。而して人 敢て「蒙（蓋い）を發す、落つるを振るう」（何かの蓋いをとるとか、落ちかけているものを振るい落とすようにたやすいこと：『史記』汲黯列傳）と謂わず。即ち死する者も復た生じ、生きる者は不愧（羞愧を感じない）なり。而して大節 自から著われ、天下の内奸外寇の心を消すに足る、／不幸にして天心 已に去り、大命 留め難ければ、則ち從容として以て義に就く（義のために殉じる）。而して國 且に恃みて「一縷の千鈞」と爲す、即ち臣の首 斷つ可し、臣の心 二無くして大節 彌いよ光あり、亦た祖宗の尊賢敬士の報に酬ずるに足る」とする。

收結で、「盖し人臣 先王の厚託を受け、人國（國家）の重寄（重大な托付）を膺く／獨り利の趨く可からざるを微し、且つ亦た害の避く可からず／獨り生の苟生（生をむさぼる）可からざるを微し、且つ亦た易う可からず」とし、大結で「死は大節の萬古（萬世）不磨（磨滅できない）にして、仰ぎて奪う可からざるの君子と爲る所以なるのみ。吁、天下 寧ぞ臣が若きに頼ること無けんや（どうしてこのような臣に頼らないことがあろうか、頼るべきだ）」と結ぶ。

後股で「不幸にして天心 已に去り、大命 留め難ければ、則ち従容として以て義に就く」と述べ、大結で「死は大節の萬古（萬世）不磨（磨滅できない）にして、仰ぎて奪う可からざるの君子と爲る所以なるのみ」と述べていることは、楊廷樞の生涯を通じての理念だったと考えられる。

さて、『歴科小題澄原前集』のもうひとりの編者である姚夢熊（字は、襄周）は、この八股文を、つぎのように評する。

古来 大節を持する者は、必ず事に臨みて猝に^{にわか}辦ず。此の文の如きは、忼慨 激烈にして、字々血性中より流出す。固より先生（楊廷樞）の自命（自任する）して素より有るを知るなり。今に至りて之を讀むに、猶お生氣凜然として穹壤（天地）を照耀（はつきりと照らし輝かす）するを覺ゆ。文相國（文天祥）の「正氣歌」に續く可し姚襄周（道光三年（一八二三）二月重鐫（康熙十七年：一六七八年序）『歴科小題澄原前集』兩論・一百六葉・「臨大節而不可奪也 楊廷樞」条）。

古来大節を有している者は、事に臨んではじめて、急いで大節を発揮しようとする。この八股文のようなものは、感嘆することが激烈で、文章に心からのものが流れ出ている。もともと楊廷樞が大節を持つことを自任して、もともと有していたことが分かるのである。今になって、この八股文を読んでも、生気があふれて天地をはつきりと照らしているように思われる。この八股文は、文天祥の「正氣歌」に続く者である、というのである。

さらに、楊廷樞とともに『同文錄』を編纂した錢禧（錢吉士）もつぎのような評を残している。

楊忠愍（楊盛繼）の「変色」（『論語』郷黨）の「八股」文を讀めば、便ち批鱗（諫言する）の手段を見、王文成（王守仁）の「子嚮」（『孟子』公孫丑下）の「八股」文を讀めば、便ち討逆（叛逆を討伐する）の手段を見る。試みに此の文を讀むに、又た當に何を云うべきや錢吉士（道光三年（一八二三）二月重鐫（康熙十七年：一六七八年序）『歴科小題澄原前集』兩論・一百六葉・「臨大節而不可奪也 楊廷樞」条）。

楊盛繼の「変色」（『論語』郷黨）の八股文からは諫言する方法を、王守仁の「子嚮」（『孟子』公孫丑下）の八股文からは反乱の鎮圧する方法、つまり行動の指針を得ることができるが、この楊廷樞の八股文からはどのような行動の指針を得ることができるか、考えてほしい、という。

錢禧も評を書いていることからすると、明末には楊廷樞のこの「臨大節而不可奪也」はかなり読まれたようである。また、この八股文の題目は、小題の形式であるので、特に生員の人た

ちによく知られていたと推測できる。というのも、生員たちが受ける試験は小題が出題されたからである。

すると、当時の生員たちは、楊廷樞が「死は大節の萬古（萬世）不磨（磨滅できない）にして、仰ぎて奪う可からざるの君子と爲る所以なるのみ」と考えていた人物だと理解していたのであろう。そこに清政権に反抗する運動に楊廷樞の名前が取りざたされることになった理由のひとつがあったといえないだろうか。

では続いて清政権による江南統治がはじまった頃の楊廷樞の事跡を検討してみたい。

(2) 福王政権崩壊後

『蘇城紀變』には、福王政権が崩壊した直後の順治二年五月十九日に、楊廷樞と潘爾彪とが反清運動を起こそうとしたと伝えている。

[順治二年五月] 十九日、孝廉の楊^①惟斗と呉江の孝廉の潘爾彪 一の浙人李^{ママ}涵春（『吳城日記』では「李^{ママ}滴春」）を郡守（知府）の陳^{ママ}卿泰（陳師泰）に荐（薦）めて謂う、其れ天文を習い、韜畧（『六韜』と『三略』の並稱。ひろく兵書を指す）を諳んず、と。首謀と爲して義兵を起こさんと欲す。百姓 淮揚（揚州）の轍を蹈まんことを恐れ、輒ち相い與に鼓譟（騒ぎ立てる）して、潘氏の廬を擊毀（打ち壊す）す。[そして] 將に浙人を毆死せんとす。本府 急ぎ解兵（解除武裝）すと出示（告示）し、以て之を慰め、乃ち止む。時に海内 主無く、人 自ら恣なるを得（『蘇城紀變』不分卷・一葉・國學保存會印『國粹叢書』第三集・光緒三十二年（一九〇六）發行）。

①共和甲戌（民國二十三年：一九三四年）印『明季史料叢書』第八冊所収影印鈔本や上海圖書館所藏鈔本『蘇城記變』は、「楊^{ママ}惟斗」の「惟」字を「維」字に作る。したがって、この「惟」字は「維」字の誤植でないかと考えられる。

（順治二年五月十九日、孝廉の楊^①維斗（楊廷樞：字は維斗）と呉江の孝廉の潘爾彪が浙江出身の李涵春を蘇州知府の陳師泰に、「天文のことを研究し、『六韜』・『三略』などの兵書に精通している」と言って推薦した。李涵春を押し立てて義兵を起こそうとしたのである。人々は、淮揚（揚州）の轍を蹈むことを恐れ、騒ぎ立てて一緒になって、潘爾彪の廬を打ち壊した。そして、李涵春を殴り殺そうとした。役所は、急いで武裝解除の告示を出し、人々を安心させたので、静まった。この時は、天下に主はなく、人々は、勝手次第であった）ただし、『吳城日記』（卷上・「乙酉（順治二年）五月二十二日」条・二〇五頁）も潘爾彪の活動のことを伝えるが、楊廷樞の名前はない⁵⁾。

また、『祁忠敏公日記』によると、故郷の浙江山陰にいた祁彪佳は、順治二年六月五日（西暦：一六四五年六月二十八日）に蘇州で清政権に任命された安撫など三人（黃家鼎・黃家謨・參將の呉某）が殺害されたと聞く。そして、祁彪佳は、蘇州のいた地方官がすべて逃げ出してしまっ

たところ、常鎮巡撫の職についていた楊文驄がやってきて、楊廷樞とともに事を挙げたのであろうという推測を記す。

〔乙酉（順治二年）六月〕初五日、・・・是の日、吳門 僞安撫ら三人を殺すと聞く。蓋し吳門の守土する者 盡く逃れ、適たま楊龍友（楊文驄）^① 沿江巡撫を以て至り、遂に楊孝廉維斗（楊廷樞）と同（一緒）に事を舉ぐるならん・・・（『祁忠敏公日記』日曆・乙酉歲・「乙酉（順治二年）六月初五日」条・十七葉）。

①弘光元年（順治二年）五月丙戌（初五日）に、「蘇松常鎮巡撫」は、「蘇松巡撫」と「常鎮巡撫」とに分割され、楊文驄は都察院右僉都御史・巡撫常鎮二府兼沿海揚州等處となっている。

蘇崇（蘇州・松江）と嘗（常）鎮（常州・鎮江）を分かちて二つの巡撫とし、兵部職方司郎中の楊文驄を以て都察院右僉都御史・巡撫嘗（常）鎮二府と爲し、兼ねて沿海揚州等處を轄せしむ（『南渡錄』卷之六・「弘光元年（順治二年）五月丁亥（初六日）」条）。

このように、清政権の江南統治が始まった時、人々は楊廷樞が反清運動を起こすであろうと考えていたようである。ただ、蘇州城内の人たちは、清朝政権に反対する活動には、否定的であったようだ。

徐秉義（字は彦和、号は果亭。江蘇崑山の人。崇禎六年（一六三三）～康熙五十年（一七一））。康熙十二年癸丑科（一六七三）の探花〔（一甲三名）〕の『明末忠烈紀實』には、

乙酉（順治二年：一六四五年）、地を吳江に避く。浙東（魯王政権）遙かに翰林院簡（檢討兼兵科給事中）を授く。〔楊〕廷樞 深く自ら韜晦し、號を復菴に改め、鄧尉山に歸隱す（『明末忠烈紀實』卷十六・「楊廷樞」条）。

という。清政権の江南支配が始まると、まず蘇州城の南の吳江に避難する。浙東の魯王政権から翰林院簡（檢討兼兵科給事中）を受けられた。そして、心情を韜晦して、号を復菴に変更し、蘇州城の西の鄧尉山に隠れたというのである。

『吳城日記』も、つぎのようにいう。

蘇郡の庚午（崇禎三年）南京の解元の楊廷樞も亦た居を光福（鄧尉山）に避く。彼は係れ

✓ 5) 『吳城日記』では、五月二十二日のこととして、つぎのように記す。

二十二日、向に吳江の舉人の潘爾彪の郡中に遷居する有り。一方術もて醫業を兼ねる者の李滴春と曰うを官に薦む。能く行兵（領兵；用兵）すと謂う。以て將と爲さんと欲し、翌日に登臺（大官に任命）し鉞を受けんことを擬す。群心 大いに駭く。李〔滴春〕の才略 恃むに足らず、輕舉（輕率な行動）挑釁（問題を引き起こす）にして、揚州の覆轍（失敗を招く）の免れ難きを慮り、遂に衆を率いて潘〔爾彪〕・李〔滴春〕の二家を擊毀（打ち壊す）す。太尊（知府の尊稱）の陳師泰 即ち朱もて撤兵を示し、以て衆心を安んず（『吳城日記』卷上・「乙酉（順治二年）五月二十二日」条・二〇五頁）。

（二十二日、吳江の舉人で蘇州城内に移り住んでいた潘爾彪という者がいた。潘爾彪は、方術師で医業も兼ねる李滴春という者を官庁の人たちに推薦した。軍隊をよく指揮でき、將軍とできるといってである。そして李滴春を將軍として、翌日に指揮権を与えるように申し出た。人々はおおいに驚いた。李滴春の才能が頼りにならず、輕拳妄動して、揚州の轍を踏むことを避けられないと考え、とうとう潘爾彪と李滴春の家を打ち壊した。蘇州知府の陳師泰は、撤兵を告示して民衆の心を安心させた）

名流、交遊 殊に廣し。湖海の屯聚する者 明朝を興復するを以て辭と爲す。楊君（楊廷樞） 潜かに書札を通ず。事も亦た之れ有り・・・（『吳城日記』巻中・「順治四年」条・二三〇頁・江蘇古籍出版社・一九九九年刊）。

蘇州の崇禎三年庚午科應天鄉試の解元の楊廷樞もまた、光福（鄧尉山）に避難した。楊廷樞は名士であり、交友関係が殊のほかひろかった。湖畔や沿海部に集結していた者たちは、明朝の復興をスローガンとしていた。楊廷樞は、そうした人たちとひそかに手紙のやりとりをしていた。そうしたことも、またあったのであろう、というのである。

確かに、侯岐曾（字は雍瞻。江蘇嘉定縣諸翟鎮の人）の『侯岐曾日記』（人民文學出版社二〇〇六年刊『明清上海稀見文獻五種』所収）には、楊廷樞などとしきりに書簡をやりとりしていることが記されている。

なお、『侯岐曾日記』（人民文學出版社二〇〇六年刊『明清上海稀見文獻五種』所収）の前言（四七九頁～四百八十頁）によると、侯岐曾は、陳子龍・顧咸正・夏完淳と南明残存政権の魯王や隆武帝朱聿鍵との手紙を中継していた。そして、反清運動を行なったとして順治四年五月十四日に処刑される。

また、何に基づいたかはまだ明らかにできないが、徐秉義の『明末忠烈紀實』に「浙東（魯王政権） 遙かに〔楊廷樞に〕翰林院簡（檢）討兼兵科給事中を授く」（『明末忠烈紀實』巻十六・「楊廷樞」条）とある。すると、楊廷樞は、侯岐曾との書簡をやり取りして、浙東（魯王政権）と連絡をとり、密かに反清運動に係わっていたのかもしれない。

また、(3) で検討する「絶命辭」の中でも「突として其の〔禍が〕来るが如しと云うと雖も、亦た已に之を知るや久し（突発的に禍がやってきたようだといっても、すでに前からわかっていたことである）」と記していることからしても、何らかの反清運動に係わっていたと推測できる。

さらに、順治二年閏六月十三日に、陳湖（蘇州城の南東にある湖）の暴徒が、蘇州城内に乱入した事件や、順治二年から三年にかけて吳易（字は日生，号は朔清，江蘇吳江の人。崇禎九年丙子科の舉人。崇禎十六年癸未科（一六四三）三甲一百六十三名の進士）たちが主導した、長白蕩（蘇州城の南東にある湖：今の周莊の北，錦溪の南）を中心に行われた清政権との戦いなどに直接的に係わったという記録は、いまのところ見出せないが『明末忠烈紀實』に、

・・・丁亥（順治三年：一六四六年），吳勝兆 反す。之が運籌（はかりごとを巡らす）を爲す者の戴之儔は，〔楊〕廷樞の門人なり。事 敗れ，〔楊〕廷樞に連なり，執えらる（『明末忠烈紀實』巻十六・「楊廷樞」条）。

とある。順治四年（一六四七）四月に、蘇松提督の吳勝兆が清政権を裏切って反旗をひるがえした。そのはかりごとに預かった戴之儔は、楊廷樞の門人であった。吳勝兆の叛乱が鎮圧され、楊廷樞はそれに連座して捕らえられた、という。すると戴之儔を通じて、楊廷樞は、吳勝兆の叛乱、そして長白蕩の叛乱とかかわっていたかもしれない。何故ならば、『吳縣志』（巻第

六十九下・列傳忠節二・長洲縣・明・「戴之儁」条・九葉)によれば、戴之儁は、長白蕩の叛徒とかかわりのあった諸生の陸世鑰の婿であったからだ。

さて、楊廷樞がいつ頃に鄧尉山に避難したのか、いまのところよく分からない。しかし、葉紹袁(字は仲韶、号は栗庵・天寥道人。江蘇吳江の人。明・萬曆十七年(一五八九)～順治五年(一六四八)。天啓五年乙丑科(一六二五)三甲四十六名の進士)の『湖隱外史』には、

……乙酉の變ありて、即ち居を〔吳江の〕蘆墟に避く。後に眞珠塢の山中に入る。田衣うちかけを帔とし、楸壠を廬として焉こゝに棲む……(『湖隱外史』一卷・殉難・「楊廷樞」条)。

とあり、まず吳江の蘆墟に避難し、続いて眞珠塢に赴いたという。

そして、『甲行日注』には、順治三年十一月五日以降になって楊廷樞の名前が記されるようになるので、順治三年十一月五日以後には、鄧尉山に滞在していたと推測できる。

なお、『吳城日記』によれば、この鄧尉山一帯は蘇州の人たちの避難場所となっていたようである。

申(順治元年／崇禎十七年：一六四四年)・酉(順治二年／弘光元年：一六四五年)の變革(王朝の交代)より、人咸な居郷を以て便と爲す。光福〔山〕・元(玄)墓〔山〕^①等の處ト居(住居を定める：擇地居住)する、寄迹(仮住まいをする)する者 賃を挟みて往く。寇盜 多く劫掠(掠奪)を行なう。郷村 復た寧ならざるを苦しむ(『吳城日記』卷中・「順治四年」条・二三〇頁・江蘇古籍出版社・一九九九年刊)。

①光福は、蘇州城の西南の太湖のそばの山々が連なる一帯をいう。そのなかのひとつの山を光福山(一名は萬峰山)という。この山の北峰を「鄧尉山」、南峰を「元(玄)墓山」と呼ぶ。

順治元年(崇禎十七年：一六四四年)・順治二年(弘光元年：一六四五年)に王朝の交代があったから、人々はみな農村暮らしを適切だと考えた。蘇州近郊の光福・元(玄)墓などの場所は、住居を選び定める者や、仮住まいをする者が、財産をかかえて行った。そのため、盜賊は掠奪を行なうことが多かった。農村も秩序が保たれず平穩でないことを苦しんだ、という。

鄧尉山に避難した楊廷樞は、葉紹袁と交流している。葉紹袁の『甲行日注』の「順治三年十一月初五日丁未」条には、つぎのような楊廷樞の発言が記されている。

〔順治三年十一月〕初五日丁未、晴れ、冷し。諧孟(薛案)・維斗(楊廷樞)と端木(顧咸正)齋中集る。倌(葉世倌)・倌(葉世倌) 従う。維斗(楊廷樞) 語ぐ「郡中の某家に三妹有り。皆な能く吹簫(簫を吹く)・度曲(曲譜にしたがって歌唱する)す。優童(若い戲曲の役者)中に雜りて、梨園(戲曲)の伎(音楽)を奏す。客皆な得て之を觀るに、聲容(声やしぐさ) 交ごも映(映え輝く)、人の心目を蕩(ゆさぶる)す。季なる者 尤も更に異出なり。及笄(満十五歳)にして、遮須夷國の歌舞に入る(『甲行日注』卷三・「順治三年十一月初五日丁未」条)。

薛案・楊廷樞とともに顧咸正の家に集った。葉世倌と葉世倌がつき従ってきた。楊廷樞が「蘇州の某家に三姉妹がいる。簫を吹き、曲につれて歌うのがうまい。若い役者のなかにまざって、

戯曲の音楽を演奏する。客人はみなこれを見ると、声やしぐさが交ごも映え輝いて、心をゆさぶられる。三姉妹の末のものが、最も怪異な演奏を行なう。十五歳にして、遮須夷國（『晉書』卷一百二・載記第二・「劉聰傳」に見える異界の国）の歌舞に到達している」といった、と伝える。

『甲行日注』によると、「順治三年十一月十日」・「順治三年十二月二日」・「順治四年正月一日」・「順治四年正月十七日」などの条に楊廷樞と出会ったことなどは記されているが、鄧尉山に避難していた楊廷樞が何をしていたかについては述べていない。

そうこうするうちに、順治四年四月二十五日の夜になって、葉紹袁は、清政権が山中で九人を捜査していると聞く。その九人とは、楊維斗（楊廷樞）・薛諧孟（薛案）・姚文初（姚宗典）・陸履常（陸坦）・顧端木（顧咸正）・吳茂申（吳有涯）・包朗威（包振）であるという。捜査が葉紹袁の身近にせまっていることに驚いた、という。

[順治四年四月] 二十五日丙申、晴れ。……夜に迫びて又た虜（清政権） 山中に於いて九人を索（捜査）すると聞く。[その九人とは] 楊維斗（楊廷樞）・薛諧孟（薛案）・姚文初（姚宗典）・陸履常（陸坦）・顧端木（顧咸正）・吳茂申（吳有涯）・包朗威（包振）なり。余（葉紹袁）に及ぶに幾ちかきを驚く（『甲行日注』卷五・「順治四年四月二十五日丙申」条）。翌日の二十六日には、九人の話はすべて偽りであったことが分かった。ただ楊廷樞が逮捕されたことから、根拠のないことで耳を疑ったのであった。しかし、人々は様々にいいふらしている。この山中の長く留まってはられない、と記している。

[順治四年四月] 二十六日丁酉、晴れ。……九人の言は皆な訛なるを知る。維斗（楊廷樞）[が逮捕されたこと] に因りて風影（根拠のないこと）もて耳を疑うなり。然れども人言 籍籍（混乱する）たり。山中 以て久しく留まる可からず（『甲行日注』卷五・「[順治四年四月] 二十六日丁酉」条）。

これによると、順治四年四月二十五日に、楊廷樞は逮捕された。

また、『吳城日記』に、順治四年（一六四七）四月下旬に、江寧巡撫が軍を僻遠の土地に派遣した。それを「剿寇」と名付けた。將兵は、地方で殺戮と掠奪を行なった。そして、財宝を満載にして帰ってきた、という。

丁亥（順治四年：一六四七年）四月下旬、撫公⁶⁾ 兵を下郷（僻遠の土地）に發す。名づけて「剿寇」と爲す。將卒 惟だ地方に在りて人を殺し、財を掠（うばいとる）す。皆な[財宝を] 満載して歸る（『吳城日記』卷中・「順治四年」条・二三〇頁・江蘇古籍出版社・一九九九年刊）。

楊廷樞の逮捕も、この「剿寇」の一環だったのかもしれない。もちろん、『明末忠烈紀實』で言及される楊廷樞の門人の戴之儒のことから、逮捕につながったということが信頼できるならば、その可能性のほうが高いのだが。

(3) 楊廷樞の逮捕と「絶命辭」

逮捕された楊廷樞は、吳江の蘆墟に護送される時に「絶命辭」を書き残す。この「絶命辭」は、『吳城日記』や『明季南略』（順治四年）・『吳城日記』（順治四年）・『南忠紀』（順治七年）や張岱（字は宗子、一の字は石公、号は陶庵、また蝶庵居士とも号す。浙江紹興の人。明・萬曆二十五年〔一五九七〕～清・康熙二十八年〔一六八九〕）の『石匱書後集』などに記録される⁷⁾。楊廷樞の心情を伝えるものとして、かなり有名なものであった。

『吳城日記』・『明季南略』に紹介されるものが、楊廷樞処刑直後にひろまったものであり、『南忠紀』は、それを節略し、『石匱書後集』は、『明季南略』系統のものを記録したと推測できる。『吳城日記』に引用される「絶命辭」は、つぎのようになっている。

蘇州に明朝の遺士楊廷樞有り。幼くして聖賢の書を読み、長じて忠孝の志を懷く。立身（人と爲り）行己（身を立てて行動する）なる、事 古人に愧じず、積學高文なる、名 常に四海に滿つ。孝廉と爲りて一十五載、世間に生まれて五十三年。士林（士大夫）郷黨（同郷）の模（典範）と作るは、東京の郭有道（郭泰）^①を庶幾う。綱常名教の重任を負うは、宋室の文文山（文天祥）と爲るを願う。惜しむらくは時命（時機）の猶（若）かず（相い及ばない）、未だ登朝して祿を食せざるに、中原の多故に値り、遂に禍を蒙りて以て生を捐つ。其の年は則ち丁亥（順治四年：一六四七年）の歳、其の月は則ち孟夏（農曆四月）の終わりなり。方に山阿（山の湾曲しているところ）に遁迹せんとし、忽ち羅網に罹り殃らる。時 其の變に遭い、命 天に付す。突として其の來るが如しと云うと雖も、亦た已に之を知るや久し。妻費氏有り。吳江の人、予に歸ぎて二十餘載なり。女の觀慧有り、張氏に適し、年 亦た二十餘春。賊を罵りて貞（貞節）を全うす。丈夫の氣概に愧じず。生を捨てて義に就くは、殊に男子の鬚眉（男子の代稱）に勝る。一家 死を視ること歸るが如く、轟轟烈烈（氣勢の浩大で壯烈なこと）たり。室を擧げて仁を成す（命を差し出す）に二（二心）無きは、炳炳烺烺（きわめてはっきりする）たり。生平の學ぶ所は、此に至

✓ 6) 周伯達は、順治四年三月十八日から順治五年閏四月二十一日まで江寧巡撫としての任に在った。ところが、『吳城日記』には、

土公（土國寶） 劾せられ、門を閉ざすこと月餘、四月初八に至りて仍お出でて事を理む（『吳城日記』卷中・「順治四年」条・二二八頁・江蘇古籍出版社・一九九九年刊）。

とある。また、

〔順治四年〕六月二十四日、新撫臺の周伯達 上任し、關門（閩門）より入る。土公（土國寶） 城外に於いて交代し過ぎ、即ち江寧に往く（『吳城日記』卷中・「順治四年六月二十四日」条・二三二頁・江蘇古籍出版社・一九九九年刊）。

①『啓禎記聞錄』（卷七・八葉・「順治四年六月二十四日」条）に「閩門」とするのによる。

とする。土國寶は、弾劾され蟄居していたものの、四月八日になって執務しはじめた。そして、あたらしく江寧巡撫に任命された周伯達は、六月二十四日に蘇州に赴任し、土國寶は城外で事務の引き継ぎを行ない、南京（江寧）に行ったというのである。

したがって、『吳城日記』の伝えるところによると、この江寧巡撫は「土國寶」を指していると考えられる。

- 7) 「絶命辭」は諸書に記録されている。『明季南略』に記されるものは、『吳城日記』のものと細かな文字の異同などはあるものの内容については、ほぼ同じである。この『明季南略』に載せられる「絶命辭」は、撰者の計六奇が、順治四年、計六奇が方全の華氏のところに滞在していた時に入手したものであるという。

おもに順治四年、予（計六奇）方全の華氏に館す。友の蘇[州]より歸りて此れ（「絶命辭」）を寄せる有り。惜しむらくは其の六首を遺る、須らく之を覓むべし。然れども公（楊廷樞）の死節の事は他書に載せず、何ぞや（『明季南略』卷之四・「楊廷樞血書併詩」条）。

順治四年、私（計六奇）は方全の華氏のところに滞在していた。その時、友人が蘇州から帰ってきて、楊廷樞の書いた「絶命辭」を送ってくれた。残念ながら、そのうちの六首を忘れてしまったので、探し出してみべきである。しかしながら、楊廷樞の殉節のことは、他書に見えない。どうしてなのか、という。

その『明季南略』卷之四・「楊廷樞血書併詩」条に載せられた「絶命辭」は、つぎのようなものである。

其の書に曰く、蘇州に明朝の遺士楊廷樞有り。幼くして聖賢の書を読み、長じて忠孝の志を懷く。立身（人と爲り）行己（身を立てて行動する）なる、事 古人に愧じず、積學高文なる、名 常に宇内に滿つ。孝廉と爲りて一十五載、世間に生まれて五十三年。士林（士大夫）郷黨（同郷）の規模（典範）と爲るは、東京の郭有道（郭泰）を庶幾う。綱常名教の重任を負うは、宋室の文文山（文天祥）と爲らんことを願う。惜しむらくは時命（時機）の猶（若）かず（相い及ばない）、未だ登朝して祿を食せざるに、中原の多難に値り、遂に禍を蒙りて以て生を捐つ。其の年は則ち丁亥の歲（順治四年：一六四七年）、其の月は則ち孟夏（農曆四月）の月なり。才は山阿（山の湾曲しているところ：山の曲折處）に隱遁せんとし、忽ち羅網に罹り陷る。時 其の變に遭い、命 天に付す。突として其の來るが如しと云うと雖も、吾 已に之を知るや久し。妻費氏有り。吳江の人、予に歸きて二十餘載なり。女の觀慧有り、張氏に適し、年 亦た二十餘春。賊を罵りて真を全うす。丈夫の氣概に愧じず。生を捨てて義に就くは、殊に男子の鬚眉（男子の代稱）に勝る。一家 死を視ること歸るが如きは（死をおそれない）、轟轟烈烈（氣勢の浩大で壯烈なこと）たり。室を擧げて仁を成すは、炳炳烺烺（きわめてはっきりする）に愧じる無し。生平の學ぶ所は、此に至りて方に快然（喜悅）なりと爲す。千古 昭らかと爲すは、到底（畢竟）終に没せざるを須む。但だ國に報ずるに能くする無く、忠を懷きて未だ展べず、終に是れ人臣の未だ竟えざるの事に因り、尚お累朝 受くる所の恩に辜く。魂 炯炯（はっきり）として天に升起、當（必）に厲鬼（惡鬼）と爲り、氣 英英（明らか）として地に墜ち、來世に期待すべし。舟中に此れを書するも、言を盡す能わず。此れを血衣に留め、以て異日を俟つ。願わくは我が知己の、遺孤（孤兒）を面付せんことを。父母を痛むが如く、即ち忠孝を思え。歿するに垂なんとするの言 此れを以て訣（告別）と爲す」と。四月廿八日、舟中に[以下のように]血書す。余（楊廷樞） 幼きより書を読み、文信國（文天祥）先生の人と爲りを慕う。今日の事は、乃ち其の志すなり。四月廿四日に縛せられ、餓えること五日なるも、未だ死せず。賊を罵るも、未だ殺されず。未だ尚お幾日の未だ死せざる有るかを知らず。遍體 傷を受け、十指 俱に損なう、而して胸中の浩然の氣は、正に信國（文天祥）の燕に市せらるる時と異なる無し。俯仰（一舉一動） 快然（喜悅）たり、以て憾み無かる可し。人生の讀書 此に至り、甚だ是れ力を得るを覺ゆ。此の遺墨を留め、以て後人の之を知るを俟たん（『明季南略』卷之四・「楊廷樞血書併詩」条）。

張岱の『石匱書後集』は、つぎのように記録する。

楊廷樞、蘇州吳縣の人、崇禎庚午（崇禎三年：一六三〇年）の南京の解元に擧げらる。文を以て世に名あり（名世：『孟子』公孫丑下：五百年必有王者興、其間必有名世者）。學者 稱して維斗先生と爲す。乙酉（順治二年）、金陵 守りを失い、[楊]廷樞 其の妻の費氏併せて其の女を攜えて、洞庭山中に匿る。三年 城市に至らず。一日、縣官の跡（追跡）する所と爲り、土國寶に報聞さる。兵を差わして擒獲す。諸校 縛して舟中に置く。[楊廷樞]は 筆墨を索むるも得ず。一指を咬み斷ち、白衫を以て遺囑を寫して曰く、蘇州に明朝の遺士楊廷樞なる者有り。幼くして聖賢の書を読み、長じて忠孝の志を懷く。士林郷黨の規模を作るは、東京の郭有道（郭泰）を庶幾う。綱常名教の重任を負うは、宋室の文文山（文天祥）と爲らんことを願う。孝廉と爲りて一十五載、世間に生まれて五十三年。嗟、時命（時機）の猶（若）かず（相い及ばない）、未だ登朝して祿を食せざるに、中原の多故に値り、遂に難を蒙りて以て生を捐つ。其の年は則ち丁亥の歲（順治四年：一六四七年）、其の日は則ち孟夏（農曆四月）の中

なり。方に山阿（山の湾曲しているところ：山的曲折處）に隠れんとするも、忽ち羅網に罹る。時 其の變に遭い、命 天に付す。突として其の來るが如しと云うと雖も、亦た已に之を知るや久し。妻費氏有り。予に歸ぎて一十餘載なり。女の觀慧有り、年 已に二十餘齡。賊を罵りて貞を全うす。丈夫の氣概に倣じず。生を捨てて義に就くは、絶えて男子の鬚眉（男子の代稱）に勝る。一家 死を視ること歸るが如く、室を擧げて仁を成せば何ぞ恨まん。但だ忠を懷きて未だ展ばす莫し。國に報ずるに能くする無し。未だ生平の完うせんと欲するの事を竟えず。尙お累朝の受くる所の恩に辜く、魂 炯炯（はつきり）として天に升らん。願わくは厲鬼（惡鬼）と爲り、氣 英英（明らか）として地に墮ち、將に來世を待たん。舟中に此れを書するも、言を盡す能わず。此れを血衣に留め、兒に付して永訣とせん。父母を痛むが如く、即ち忠孝を思え、と（『石匱書後集』卷第二十八・「劉華楊劉續沈李鄭蔡列傳」条）。

なお、徐秉義の『明末忠烈紀實』には、つぎのようにいう。

楊廷樞、字は維斗、蘇州吳縣の人なり。諸生爲りし時、氣節を以て自任す。天啓丙寅（天啓六年：一六二六年）、逆奄 詔を矯めて吏部周順昌を逮（逮捕）す。〔楊〕廷樞 士民を倡率（引率）し、哭聲 地を震う。校尉 呵問（責め追究する）し、即ち之を擊殺せんとす。已にして御史の黃尊素を逮（逮捕）する者も亦た至る。驛中の士民 共に閭門に出でて其の舟を焚き、其の駕帖（逮捕状）を毀つ。巡撫の毛一鷺 亂民を根究す。〔楊〕廷樞 幸いに免るを得。然れども亦た此れを以て名を世に知らる。崇禎庚午（崇禎十三年：一六四〇年）、應天鄉試第一に擧げらる。乙酉（順治二年：一六四五年）、地を吳江に避く。浙東（魯王政權） 遙かに翰林院簡（檢）討兼兵科給事中を授く。〔楊〕廷樞 深く自ら韜晦し、號を復菴に改め、鄧尉山に歸隱す。丁亥（順治三年：一六四六年）、吳勝兆 反し、之が運籌（はかりごとを巡らす）を爲す者の戴之儔は、〔楊〕廷樞の門人なり。事 敗れ、〔楊〕廷樞に連なり、執えらる。舟中に於いて自述して曰く、「予（楊廷樞） 幼きより書を読み、文信國（文天祥）の人と爲りを慕う。今日の事は、乃ち其の志なり。四月二十四日に縛られ、餓えること五日なるも死せず。大いに罵るも、又た殺されず。未だ尚お幾日の未だ死せざる有るかを知らず。遍體 傷を受け、十指 俱に損なわる。而して胸中の浩然の氣は、正に信國（文天祥）の燕市に斬らるる時と異なる無し。俯仰忻然たり、以て憾み無かる可し、一生の讀書 此に至り、方に力を得るを見ゆ」、と。五月朔、大師 吳江の泗洲寺に會す。〔楊〕廷樞 屈せず。巡撫 其の名を重んじ、之に剃髮を命ず。〔楊〕廷樞 曰く、頭を斫るの事は小なり、剃髮の事は大なり、と。乃ち寺橋に殺さる（『明末忠烈紀實』卷十六・「楊廷樞」条）。

また、康熙年間後期に書き終えられたとされる（中華書局一九五九年出版『南疆逸史』前言による）溫睿臨（字は鄰翼、一字は令貽。浙江烏縣（今の吳興）輯里の人。康熙乙酉科（康熙四十四年：一七〇五年）の舉人）の『南疆逸史』には、つぎのようにある。

楊廷樞、字は維斗、吳縣の人なり。諸生と爲り、氣節を以て自任す。天啓丙寅（天啓六年：一六二六年）、逆奄 詔を矯めて吏部周順昌を逮（逮捕）す。〔楊〕廷樞 士民數千人を倡率（率先）し、巡撫に謁し、上書して申救せしめんと欲す。巡撫 可ならずとす。哭聲 地を震う。校尉 呵問（追究）し、即ち之を擊殺せんと欲す。已にして御史の黃尊素を逮（逮捕）する者 又た至る。驛中の士民 共に閭門に出でて其の舟を焚き、其の駕帖（逮捕状）を毀つ。巡撫の毛一鷺 禍を懼れ、亂民を根究し、五人を殺し以て奄に謝す。蘇人 義あり以て其の墓を表す。所謂ゆる「五人之墓」なり。〔楊〕廷樞 僅かにして免るを得。然れども亦た此れを以て名を知られる。崇禎庚午（崇禎十三年：一六四〇年）、應天鄉試第一に擧げらる。乙酉（順治二年：一六四五年）、地を河濱に避く。浙東 遙かに翰林院檢討兼兵科給事中を授く。〔楊〕廷樞 深く自ら韜晦し、號を復菴に改め、鄧尉山に歸隱す。丁亥（順治三年：一六四六年）、吳勝兆 反し、之が運籌（はかりごとを巡らす）を爲す者の戴之儔は、〔楊〕廷樞の門人なり。詞 〔楊〕廷樞に連なり、執えらる。舟中に於いて慨然として曰く、余（楊廷樞） 幼きより書を読み、文信國（文天祥）の人と爲りを慕う。今日の事は、乃ち其の志なり。縛られて以來、餓えること五日、遍體 傷を受け、十指 俱に損なわる。而して胸中の浩然の氣は、正に信國の燕市に斬らるる時と異なる無し。俯仰忻然たり、以て憾み無かる可し、と。五月朔、大師 吳江の泗洲寺に會す。〔楊〕廷樞 屈せず。巡撫 其の名を重んじ、之に薙髮を命ず。〔楊〕廷樞 曰く、頭を斫るの事は小なり、薙髮の事は大なり、と。乃ち寺橋に殺さる。刑に臨みて大聲して曰く、生きては大明の人と爲り、と。刑する者 急ぎて刃を揮い、首 地に墮つるに、復た曰く、死しては大明の鬼と爲らん、と。監刑（処

りて方に快然（喜悅）なりと爲す。千古 常に昭^{あき}かなるは、到底（畢竟）終に没せずと爲す。但だ國に報ずるに能くする無く、忠を懷^{いだ}きて未だ展^のべず、終に是れ人臣の未だ竟^おえざるの事に因り、尚お累朝 受くる所の恩に辜^{そむ}く。魂 炯炯（はっきり）として天に升り、氣 英英（明らかに）として地に墜ち、當（必）に厲鬼（惡鬼）と爲り、來世に期待すべし。舟中に志しを書するも、言を盡す能わず。此れを血衣に留め、以て異日を俟つ。知己の遺孤（孤兒）に面付せんことを願い求む。父母を痛むが如く、即ち忠孝を思え。歿するに垂なんとするの言 此れを以て訣（告別）とす」と。四月廿八日、舟中の書に又た「つぎのように」云う。余（楊廷樞） 幼きより書を読み、文信國（文天祥）の人と爲りを慕う。今日の事は、乃ち素志なり。四月廿日に縛せられ、餓えること五日なるも、未だ死せず。賊を罵るも、未だ殺されず。未だ尚お幾日有るかを知らず。未だ死せざるに遍體 傷を受け、十指 俱に損なう、而して胸中の浩然の氣は、信國（文天祥）の燕の市に赴く時と異なる無し。此の心 快然（喜悅）として恨まず。殘墨を留むるに因りて、以て後人に貽らん、と（『吳城日記』卷中・「順治四年」条・二三〇頁・江蘇古籍出版社・一九九九年刊）。

①郭泰（？～建寧二年（一六九）？）：字は林宗。太原界休（汾州縣）の人。「有道」は漢の選舉科目のひとつ。學問道徳のある者を選抜する。郭泰は、かつて有道科に選ばれたので「有道」と呼ばれる。學問を修めて上京し、河南尹の李膺などの名士と交際して、人材の拔擢に努力し、名士とよばれる。官職に就かなかつたので、党錮の禍を免れた。『後漢書』に立傳される（『後漢書』郭符許列傳第五十八）。なお、『後漢書』では「郭太」に作る。それは、『後漢書』列傳を選した范曄の父の名が「范泰」であるので、「泰」字を忌んで「太」字に改めたためである。

蘇州に明朝の遺士の楊廷樞がいた。幼少より聖賢の書物を読み、長じて忠孝の志を抱くようになった。身を立て、自己の志にしたがって行動することについては、むかしの賢人に愧じることがなかった。學問や文章については、いつも名前が天下に知られた。孝廉（舉人）となつてから十五年、この世に生まれて五十三年となる。讀書人や郷里の規範となるのは、後漢の郭有道（郭泰）のようでありたいと願つた。綱常名教の重任を担うことは、宋の文文山（文天祥）のようでありたいと願つた。残念ながら時節が異なり、まだ官職に就く前に、国家の多難に直面し、とうとう禍にあって命を捐^すてることになった。その年は丁亥（順治四年：一六四七年）で、その月は四月の終わりである。はじめは山の湾曲しているところに隱遁しようとしたものの、突然わなにかかつてとがめられてしまった。時は災難に遭遇し、命は天に付託している。突發

刑を監督する）なる者 爲^{ため}に昨舌（驚いて舌を巻く）す。亟^{すみ}やかに禮して之を殯^①す（『南疆逸史』卷十三・列傳第九・「楊廷樞」）。

①謝國楨（字は剛主。河南安陽の人。一九〇一年～一九八二年）の『增訂晚明史籍考』は、「溫睿臨の『南疆逸史』は、即ち此の書（『明末忠烈紀實』）を以て藍本（底本）と爲す」（『增訂晚明史籍考』卷九・總記・南明史乘・「明末忠烈紀實二十卷 南京圖書館藏鈔本 天津人民圖書館藏鈔本 北京圖書館藏野史二十一種本 海鹽朱氏舊藏鈔本」条）という。

的にやってきたようだといいても、私（楊廷樞）はすでに前からわかっていたことである。私（楊廷樞）には妻費氏がいる。吳江の人間である。私（楊廷樞）に嫁いで二十年余りになる。娘の觀慧がいる。張氏に嫁いだ。年齢は二十歳余りになる。賊を罵って貞節をまっとうした。丈夫の氣節に愧じる者ではない。命を捨てて義についたことは、とりわけ男性にも勝っている。一家が死をおそれないことは、勇ましく壮烈である。一家を挙げて身を犠牲にして二心がないことは、きわめてはっきりしている。つねづね学んできたものが、ここに至ってすばらしいものであったと分かった。とこしえにはっきりしているものは、永遠に没しないものである。ただ、国に報いることができず、忠を懷いていまだに發揮することができず、人臣としての事を成し遂げることができない（進士となって官僚になれなかった）ことから、代々にわたって受けたところの恩に背いてしまった。魂ははっきりと天にのぼり、気は明らかに地上に存在する。そして、必ず厲鬼（惡鬼）となり、来世に期待したい。舟中に思う所を書いているが、言葉を尽くすことはできない。これを血染めの衣に書きとどめて、後世を待ちたい。私の知己が、これを私の遺児に直接わたしてくれることを願っている。父母をいたむように、忠孝を思え。いままさに歿しようとする私の言葉は、これをもって告別とする、という。また、四月二十八日、舟中でつぎのように書く。私（楊廷樞）は、幼少より書物を読み、文信國（文天祥）の人となりを慕っていた。今日の事は、もとより志すところである。四月二十日に縛につき、五日間絶食したものの、死ぬことはなかった。賊（清政權）を罵っても、まだ殺されない。まだどのくらいの日があるか分からない。まだ生きてはいるが、体中傷つき、指はすべて損傷した。しかし胸中の浩然の気は、文信國（文天祥）が北京で処刑される市場に赴いた時と異なるものではない。私のこの心は、喜ばしく、憾みはない。此の真筆を留めて、後の人たちにこのことを分かってもらいたい、という。

読書人としては学問があり人材の拔擢に努力した後漢の郭泰のようになりたいと願い、名教の重任を負う者としては、南宋の文天祥のようになりたいと願った、というのである。実際、楊廷樞は、南宋に殉じた文天祥の人となりに非常に共感している。

さらに言うと、この「絶命辭」は、(1)で検討した「臨大節而不可奪也」題文の八股文の大結の「死は大節の萬古（萬世）不磨（磨滅できない）にして、仰ぎて奪う可からざるの君子と爲る所以なるのみ」と共通するような気分が濃厚であるように感じられる。

『吳城日記』は、楊廷樞が捕らえられた前後のことをつぎのように記す⁸⁾。

蘇郡の庚午（崇禎三年）南京の解元の楊廷樞も亦た居を光福（鄧尉山）に避く。彼は係れ名流、交游殊に廣し。湖海の屯聚する者 明朝を興復するを以て辭と爲す。楊君（楊廷樞） 潜かに書札を通ず。事も亦た之れ有り。上臺（上官）に風聞（風聞が伝わる）し、密かに兵を統べる者をして楊君（楊廷樞）及び其の内眷を襲い執う。時に土（土國寶）・陳（提督學政：陳昌言）・巴（鎮守江南江寧等處滿洲將軍：巴山）の三公 扎營（駐屯）して蘆墟に在り。[楊]廷樞を解りて營に到る。抗言（高聲して言う）して屈せず。巴提

督の手づから刃（刀劍を用いて殺害する）する所と爲る。妻女 辱を受けること言う可からず。責（求）めて千金を餽りて取贖（罪をあがなう）せしむ。遷延（留まったままに進まない）すること半月、諸々の門生 銀を湊めて贖い出す（『吳城日記』巻中・「順治四年」条・二三〇頁・江蘇古籍出版社・一九九九年刊）。

蘇州の崇禎三年庚午科應天鄉試の解元の楊廷樞もまた、光福（鄧尉山）に避難した。楊廷樞は名士であり、交友関係が殊のほかひろかった。湖畔や沿海部に集結していた者たちは、明朝の復興をスローガンとしていた。楊廷樞は、そうした人たちとひそかに手紙のやりとりをしていた。そうしたことも、またあったのであろう。清政権に風聞が伝わり、内密に軍隊を統率するものを派遣して、楊廷樞とその女性家族を逮捕した。この時、清政権の土國寶（山西大同の人。

- ✓ 8) 吳江の周邦翰（字は、高臣。嘉善の籍。康熙二十三年甲子科（一六八四）武科挙で武舉人となる：同治『蘇州府志』（卷第六十七・選舉九・武科・國朝武舉人・十五葉）による）が六十三歳となった康熙四十六年（一七〇七年）に書いた「故明殉節解元楊先生崇祀泗州寺記」には、処刑された当時の様子を目撃した泗州寺の僧景行の証言が記されている。それによると、つぎのようにいう。

……老僧景行 當年の「楊廷樞が処刑された」情事を目撃す。〔そして周邦翰に〕告げて曰く「丁亥（順治四年）五月二日、總制の巴公・撫軍の土公・提督の吳公 兵を帶（率いる）して搜山（山中に入って搜索する）し、光福祇林庵より来る。數十舟 寺前に泊まる。三公（巴山・土國寶・陳昌言）俱に絳衣（深紅色の衣服。軍服の意味）もて山門に列坐し、先生（楊廷樞）に登岸を傳請す。先生（楊廷樞）散髮（髪をふり乱す）跣足（素足）にして至り、（外に向かつて）して地に坐す。三公（巴山・土國寶・陳昌言）起立して揖して曰く、「楊先生（楊廷樞） 從了罷（從えばそれでよい）、〔そうすれば〕你的大位（高官）を享くを得るを保（保証）せん」と。先生（楊廷樞）聲を厲しくして曰く、「吾 死するを願う。官と爲るを願わず。生きては明朝の人と作り、死しては明朝の鬼と作らん。列位の大人 早に殺し了れば罷（それでよい）」と。先生（楊廷樞）の髪 甚だ長し。父老士民多人、哭して前に跪きて、剪を舉げて少しく髪を去らんことを求む。先生（楊廷樞）曰く、「我 髪を完うして以て先人に見えんと欲す」と。隨いて命じて縛りて橋下に至るも〔楊廷樞は〕喚べり。轉じて仍お前語を申（申し伝える）ふ。先生（楊廷樞）の語も亦た前の如し。是の若くすること三たびなり。志氣 終に奪う可からず。從容として義に就きて死す。三次（勸めることが三度目）に當りて橋下に至る。時に三公（巴山・土國寶・陳昌言）已に先生（楊廷樞）を釋すを議す。〔赦免の〕語 少久（やや久しく）にして至れば則ち〔処刑時間に〕及ぶ無し。兵某 其の元（首）を匿せば、之を求めるも得ず。君先人（周邦翰の父もしくは祖父）庭茂公及び里人の陳君貞卿（陳貞卿）・陸君聖（陸聖） 捐資（寄付）して贖（罪をあがなう）するを謀り、〔首を取り返して〕歸る。先生（楊廷樞）は、趙田の費氏の壻なり。曾て沙枋（堤防に用いる大きな木の杭）を製して、外父を壽ぐ。是に至りて先生の門人の汪紹原 請いて以て之を殮す。寺に在りて喪を發すること三日。三君子 其の事を主り、弔う者 萬人に幾し……と（民國十六年（一九二七）・吳江陳希恕輯『楊忠文先生實錄』（卷三・七葉～八葉）所収の「故明殉節解元楊先生崇祀泗州寺記」）。

①吳公は、蘇松提督の吳勝兆を指しているのかもしれない。ただし、吳勝兆であるならば、順治四年（一六四七）四月に、清政権を裏切って反旗をひるがえしているのので、丁亥五月二日に吳江の泗州寺にいたとは考えにくい。『吳城日記』では、「陳公」とあるので、提督學政の陳昌言（字は道莊。山西澤州の人。崇禎七年甲戌科（一六三四）三甲五十六名の進士）の誤字ではないかと考えられる。

処刑直後の記録ではなく、後年の回顧になるので、いろいろな思い込みが付加されていると推測できる。しかし、「生きては明朝の人と作り、死しては明朝の鬼と作らん」という発言が、清政権の三人の高官（巴山・土國寶・陳昌言）に対して述べられたことや、「散髮（髪をふり乱す）跣足（素足）」で連行されてきたことなどは、真実を伝えているように思われる。

もともとは明の總兵であった）・提督學政の陳昌言（字は道莊。山西澤州の人。崇禎七年甲戌科（一六三四）三甲五十六名の進士）・鎮守江南江寧等處滿洲將軍の巴山の三公が軍隊を率いて吳江の蘆墟に駐屯した。そこで、楊廷樞を軍營に護送した。楊廷樞は、声高に叫んで屈しなかった。そして、鎮守江南江寧等處滿洲將軍の巴山が手ずから刃を振るうことになった。妻女も、悲惨なことになったのは言うまでもない。そして、千金を差し出すことで妻女の罪をあがなうことを要求した。半月の間、事態は進展しなかったが、楊廷樞の門生たちが、銀をあつめて差しだして、罪をあがなった、という。

楊廷樞より六歳年下の查繼佐（字は伊璜、号は東山先生・樸園先生。浙江海寧の人。明・萬曆二十九年七月四日〔西暦：一六〇一年八月一日〕～清・康熙十五年正月二十日〔西暦：一六七六年三月四日〕）は、『國壽錄』（中華書局 1959 年出版鉛印本『國壽錄』の「前言」によると、だいたい順治六年（一六四九）から順治十四年（一六五七）までの間に書かれたとする：中華書局一九五九年出版鉛印本『國壽錄』「前言」二頁）において、つぎのように記す。

……乙酉（弘光元年／順治二年）の南都の變ありて、〔楊〕廷樞 洞庭の僻處に避く。清兵 無意（たまたま）に〔楊〕廷樞を跡（追跡調査）し、他求を以ての故に、偶たま之を得。〔楊〕廷樞 髪を完く未だ髡らざればなり。故を以て令を犯すと爲し、院訊（役所での尋問）に逮ぶ。訊ぬる者 其の素（質樸で飾り気がない）なるを重んじ、縛を解き、〔楊〕廷樞を尊びて上坐とす。〔楊〕廷樞 上坐し、抗言（高聲）して撓る所無し。訊ぬる者 執卑（へりくだる）して爲に好言（言葉巧みに）に慰（慰撫）し、髡首すること清法の如きを得れば止む、と。〔楊〕廷樞 法の如くするを肯んぜずして曰く、明に薙髮の臣子無し。即ち死すれば可なるのみ、と。尋いで語げて訊ぬる者を刺る。多くは不恭なり。訊ぬる者 已むを得ず、〔楊〕廷樞を法に置く（『國壽錄』卷之二・「舉人楊廷樞傳」・中華書局一九五九年出版鉛印本・五十九頁）。

弘光元年（順治二年）に南京の福王政權が崩壊し、楊廷樞は洞庭湖の辺鄙なところに避難した。清政權の兵がたまたま楊廷樞を追跡して調べ、別件で捕らえた。それは、楊廷樞がまだ辮髪にしていなかったことであった。そうしたことから法律に背いたとして、役所での尋問となった。尋問する者は、楊廷樞の質樸で飾り気がないことを尊重し、縄を解いて、上座にすわらせた。楊廷樞は、上座にすわり抗議して乱れることがなかった。尋問する者は、へりくだって言葉巧みに慰撫して、清政權の法律の定めのように辮髪にしたならば、それ以上追求はしないという。楊廷樞は法に従うことを認めず、「明朝には辮髪した臣下はいない。死をもってすればそれでいい」という。そして、尋問する者をそしった。不敬のことばが多かった。尋問する者は、しかたなく楊廷樞を処刑した、という。

捕まえた楊廷樞の「縛を解き、〔楊〕廷樞を尊びて上坐とす」などと、楊廷樞に対して同情的に記される。

さらに、張岱（字は宗子、一の字は石公、号は陶庵、また蝶庵居士とも号す。浙江紹興の人。

明・萬曆二十五年〔一五九七〕～清・康熙二十八年〔一六八九〕の『石匱書後集』になると、捕らえられた楊廷樞と清政権の土國寶とがつぎのような対話をしたという。

・・・〔楊廷樞は「絶命辭」を〕寫^かき畢^{おわ}りて諸校（将校）に付して曰く、小兒 來りて贖う、必ず以て相い酬する有り。之を藏して失うこと母きなれば幸いなり、と。諸校 擁し、〔土〕國寶に見えしむ。〔土〕國寶 塔^{にわ}に下り相い勞して曰く、楊先生（楊廷樞）天下の重名を負い、奈何ぞ自愛せざらん。此の數莖の髪を斬み、以て自ら僇辱（戮辱、刑辱）を取らんや、と。〔楊〕廷樞 曰く、〔楊〕廷樞 世々國恩を受く。死に即きて以て先帝に報ずる能わざれば、赧顔（慚愧）なること實に甚だし。今、既に收めらる。死有りて二無し。惟だ蚤に殺し以て生平を遂げんことを願う、と。〔土〕國寶 曰く、楊先生（楊廷樞）は天下の名士なり。其の身を養いて以て用いること有らん。何ぞ輕がるしく死するを得ん。即し用世（世に用いられる）を屑^{いさぎよ}しとせざれば、少しく數莖〔の髪〕を芟^{のぞ}き、林下に優游するは、何如、と。〔楊〕廷樞 曰く、此れ鼠尾と何ぞ異ならん。〔楊〕廷樞 惟だ一死有るのみ。敢えて命を奉ぜず、と。〔土〕國寶 曰く、今、亦た薙髮して僧と爲る者有り。先生（楊廷樞）何ぞ此れを出さず、と。〔楊〕廷樞 曰く、髪を全うして偷生（生きながらえる）するは、已に本願に非ず。況んや薙髮して死を逃れるをや。愈々趨^{おもむき}て愈々下る。人世に再活するは無顔（羞愧）なり。即ち死を賜わらんことを願う、と。〔土〕國寶 乃ち曰く、楊先生（楊廷樞）の忠義 此の如し。先生（楊廷樞）の爲^{ため}に此の大節を成さざるを得ず、と。〔楊〕廷樞 點頭して謝して曰く、敬して賜うるを受けん、と。遂に慷慨して戮に就く。刑に臨みて但だ「太祖高皇帝」と呼び、膝を屈せず。頭 將に落ちんとするに猶お「大明」の二字を呼びて死す。後、交游（朋友） 五十金を醵^{あつ}め血衣^{あがな}を贖い出し、海内に流傳す。其の郷人の葉襄 云う、維斗（楊廷樞）の妻 尚お在り。死節の事無し、と（『石匱書後集』卷第二十八・「劉華楊劉續沈李鄭蔡列傳」条）。

楊廷樞は「絶命辭」を書き終わり、まわりの将校たちに渡して、「息子がやってきて、この「絶命辭」を買い求めようとして謝礼しようとするだろう。残してなくさないようにしてもらえれば幸いである」という。将校たちは、わきから支えて土國寶に拝謁させた。土國寶は、急いで上座から下りてきて慰勞して、「楊先生（楊廷樞）は、天下の重名を有しておられます。どうしてご自愛なさらないのか。この髪を惜しんで、ご自身から刑罰の辱めをうけることをされるのか」という。楊廷樞は、「代々明朝のご恩を受けている。命をもって先帝（崇禎帝）に報いることができないのならば、慙愧のきわみである。いま捕らえられたのであるから、死以外になにもない。ただすみやかに処刑して私（楊廷樞）のもともとの願いを遂げさせてもらいたい」という。土國寶は、「楊先生（楊廷樞）は天下の名士です。自重されればお役にたつことがありますでしょう。どうして軽々しく死ぬことを求めようとされるのか。もしも世に用いられることをいさぎよしとされないならば、頭髮を除き去って、田野で悠々とされるのはいかがでしょうか」という。楊廷樞は、「それはちっぽけな鼠と異ならない。私（楊廷樞）には一死あるだ

けである。あえてお勧めには従いません」という。土國寶は、「いま薙髪して僧侶となった者もおります。先生（楊廷樞）は、どうしてこうしたことをお申し出にならないのか」という。楊廷樞は、「髪を残したままで薙髪せず生きながらえるのはもとからの願いではない。ましてや薙髪して死ぬことを免れることなどますます本願ではない。策を講ずれば講ずるほど下策となる。いまこの世で生き延びるのはみっともないことである。死を賜わることを願いたい」という。土國寶は、「楊先生（楊廷樞）の明朝に対する忠義は、このように立派なものである。先生（楊廷樞）のために大節を遂げさせなければならない」という。楊廷樞は、会釈して感謝し、「つつしんでご厚意をお受けする」という。そして、とうとう堂々と処刑された。処刑にのぞんで、ただ「太祖高皇帝」とさげび、ひざまずかなかった。頭が離れる時にも「大明」の二字をさげんで亡くなった。後に友人たちが、五十金を出し合って「絶命辭」が書かれた血衣を買い求め、その「絶命辭」は、天下に伝えられた。同郷の葉襄はいう、「楊廷樞の妻は、まだ生きており、死節の事実はなかった」と。

処刑される時に叫んだことは、他書にも記されているが、清政権の土國寶との具体的なやり取りは他書には見当たらない。

『吳城日記』のいう、「抗言（高聲して言う）して屈せず。巴提督の手づから刃（刀劍を用いて殺害する）する所と爲る」から、『國壽錄』の対話のようになり、最終的には『石匱書後集』のように、いかにも忠義の人物が話すであろう会話に変化していったと考えられる。

いずれにせよ、楊廷樞が明朝に殉じたことは、人々の記憶に残り、処刑された蘆墟では、乾隆十年（一七四五）に祠を建てて祀ることが吳江知縣の丁元正から提案されたという。

……其（楊廷樞）の門人の迮紹原 其の〔楊廷樞の〕屍を購^{ほうむ}いて塋^{ママ}る『明史』に本づく^①。蘆墟の人 爲めに神主を寺廡に置く。乾隆十年（一七四五）、吳江知縣の丁元正 特祠を建て之を祀らんことを詳請（事情を詳細に報告して願い出る）す^②（乾隆『吳江縣志』卷之三十六・人物十三・寓賢・明・「楊廷樞」・三十九葉）。

①『明史』に「〔楊〕廷樞聞變、走避之鄧尉山中。久之、四方弄兵者羣起、廷樞負重名、咸指目廷樞。當事者執廷樞、好言慰之。廷樞嫚罵不已、殺之蘆墟泗洲寺。首已墮、聲從項中出、益厲。門人迮紹原購其屍葬焉」（『明史』卷二百六十七・列傳第一百五十五・「徐汧」条）。

②乾隆『吳江縣志』に「楊忠文祠は、明の節士の楊廷樞を祀る、蘆墟泗洲寺の東に在り。乾隆九年（一七四四）建つ、知縣の丁元正 記あり。有司 以春秋の二仲（中間の月）の上戌日（上旬の戌日）を以て官を分かちて祭を致す。〔乾隆〕十二年（一七四七）より始めて祭品（祭具） 捐備す（乾隆『吳江縣志』卷之七・壇廟祠・十葉）。

門人の迮紹原が楊廷樞のなきがらを購って、葬った。乾隆十年（一七四五）に、吳江の知縣の丁元正が特祠を建設して祀ることを詳請（事情を詳細に報告して願い出る）した、という。

ちなみに、光緒『蘇州府志』（光緒九年序）に、

楊忠文祠 蘆墟の泗洲寺の東に在り。明の楊廷樞を祀る。乾隆九年（一七四四） 建つ……

(卷第三十八・壇廟祠宇三・「楊忠文祠」条・六十八葉)

とあり、少なくとも光緒九年(一八八三年)頃までは、祭祀は続けられていたといえる。

「絶命辭」をさかのぼる九年前の崇禎十二年(一六三九年)秋八月に書かれた「心史序」にも、やはり文天祥のことが記されている。そして、『心史』⁹⁾の著者の「鄭思肖は、天に昇って日星となり、鎮座して河岳となり、ただよって風雨となり、振動して雷となり、万年にわたる忠臣孝子に化して、我が国家の無窮の功績を強固にし、元を滅ばし宋の恥を雪ぎ、晴らす事の出来ないことに報いようとしたのである」という。いま検討した「絶命辭」に通じるものが見て取れる。

樞(楊廷樞) 幼きより『宋史』を読み、徳祐(一二七五年～一二七六年)の間の事に至りて、未だ嘗て扼腕(憤慨する)・裂眦(はげしく怒る)・流涕(涙を流す)・太息(ため息をつく)せざるにあらざるなり。斯の時に當り、天地 之が爲に震怒し、鬼神 之が爲に血を飲む(極度に悲憤する:『文選』卷四十一所収の李陵「答蘇武書」に「天地爲陵震怒、戰士爲陵飲血(天地 [李] 陵が爲に震怒し、戰士 [李] 陵が爲に血(涙: 李善注に「血は即ち涙なり」)を飲む)」。而して況や其の世に居り、是れ其の臣子たる者をや。竊かに意うに文信國(文天祥)數公の外、必ず多く義もて粟を食らわず、坐して北面せず、九原(黄泉)に血碧の湮没(埋没)して彰われざる者有るも、特に未だ攷える可からず。適たま陸子垂(陸嘉穎:字は子垂。江蘇太倉の人)年伯^①の所より鄭所南の『心史』摹本を見る。『心史』とは、承天寺の井中の鐵函中の物にして、井を浚うを以て出る者なり。其の文銘に似たる者・偈に似たる者・讖に似たる者・誓詞に似たる者有りて、間 解す可からず。而れども中原左衽の悲しみは、反覆して已む無し。[それを見て]何ぞ其れ憤し以て痛まんや。苟も此れを讀みて泣かずして數行下る者は、必ず忠孝の人に非ず。「古今正統論」と余(楊廷樞)の意と甚だ合す。「文丞相敘」の事は、史 未だ備わらざる所有り。[「文丞相敘」条の]「頸間白膏」^②の事は尤も異なり。要するに真實不誑の語と爲すなり。抑そも余(楊廷樞) 之を聞く、「忠孝の至りは、神明に通ず」^③と。其れ果たして是れなるかな。我が太祖 胡元を汎掃(掃き出す)し、腥穢(汚らわしいもの)を廓清す。[こうしたことを]誰か前に之を知らん。而して『心史』に「我が「久久書」は必ず大明の天に開かれん」^④と云う。何ぞ其れ異(尋常でない)なるや。公 又た自ら「此の書は虚空の如し、天地鬼神も違^{そむ}く能わず。水も濕らせる能わず、火も然(燃)す能わず、萬萬(絶對)に能く

9) 『心史』は、南宋末・元初の鄭所南(名は思肖、字は憶翁、号は所南)の著作といわれる。鄭所南は、この書物を書き上げただけで、発表することもなく、厳重に保管して、蘇州城内の承天寺の井戸に置いたという。それが、明末の崇禎十二年(一六三九)にその井戸から現れたとされる。内容が、あまりにも当時の讀書人たちの心情に合致したものであったので、明末には、たいへん流行したようである。

なお、『心史』の真贋については、井戸から出現した当時から様々な議論がなされた。いまでは、贋作ではないという意見が一般的である。真贋の論争については、『鄭思肖集』(陳福康校點・上海古籍出版社一九九一年出版)の附録四・附録五に詳しく紹介される。

之を壊す無き者なり^⑤」と云う。今、果たして水に入るに四百年に亘るに壊たず、且つ復た世に出づ。豈に公（鄭思肖）の實に焉に憑くに非ざるか。公（鄭思肖）方に升りて日星と爲り、鎮して河岳と爲り、蕩（ただよう）して風雨と爲り、震いて雷霆と爲り、化して百千萬億の忠臣孝子の身と爲り、以て我が國家の無疆の歷服（功績：『書經』大誥に「天降割于我家不少，延洪惟我幼沖人，嗣無疆大歷服（惟れ我が幼沖人に延洪す，無疆の大歴を嗣^{かた}ぎて服す）」）を鞏^{かた}くし、元を滅ぼし宋の恥^{のぢ}を雪ぎ、未だ艾^{のぞ}くこと有らざるに報ぜんとするなり。而して是の書 先ず出で、後の觀る者は、其れ亦た將に斯文に感ずること有らんとす。

時に崇禎己卯（崇禎十二年：一六三九年）秋八月，姑蘇の後學楊廷樞 敬しみて題す（「心史序」：『鄭思肖集』（陳福康校點・上海古籍出版社一九九一年出版）所収による）。

①崇禎三年庚午科（一六三〇年）應天鄉試の舉人の陸坦（字は履常）の父親。陸坦は、楊廷樞と鄉試の同期中式であるので、「年伯」とした）。

②『心史』雜文・「文丞相敘」条に、「[文天祥を]斬るに及び、頸（うなじ）の間に微かに白膏を湧かす。腹を剖^さきて視るに、但だ黃水あるのみ。心は赤よりも純なり。忽必烈 其の心肺を取りて衆酋と之を食らう」。

③蘇軾の「祭英烈王祝文」に「忠孝之至，實與天通（忠孝の至りは，實に天と通ず）」。

④『心史』久久書・久久書後八跋・「八」条に、「我 知る，我が「久久書」は，必ず大明の天に開かれん，と」。

⑤『心史』自跋に「此の書は紙なりと曰うと雖も，當に虚空の如きなり。天地鬼神も違ふ能わず。雲霧も翳す能わず。風も動かす能わず。水も濕らせる能わず。火も然（燃）す能わず。金も割く能わず。土も塞ぐ能わず。木も蔽う能わず。萬萬に能く之を壊す無き者なり」。

私（楊廷樞）は，幼い時から『宋史』を読み，南宋末の徳祐年間（一二七五年～一二七六年）の事にいたると，憤慨するし，はげしく怒り，涙を流し，ため息をつかないことはなかった。この時には，「天地はそのために怒りに震え，兵卒もそのために血涙を飲んだ」のである。ましてやその時期に生きて，臣下となっていたものはどうであつたろうか。考えるに文天祥などの人たちのほかに，義をもって元政權の禄を食もうとせず，役人とならず，九原（黄泉）に血統が掻き消えてしまひはつきりしなくなった人たちがいたのだろうが，分からない。崇禎三年庚午科（一六三〇年）の應天鄉試に同期合格した陸坦（字は履常）の父親の陸嘉穎のところから，偶然に鄭所南の『心史』の摹本（原本どおり書き写した本）を見た。『心史』は，蘇州城内の承天寺の井戸の中の鉄の箱にあったもので，井戸を浚った時に出現した。その文章は，銘に似る者・偈に似る者・識に似る者・誓詞に似るものなどがあり，ところどころ理解できない。しかしながら，中原が夷狄のものとなった悲しみは，繰り返し記されて途絶えることがない。それを見てどうして，憤って痛ましく思わないのだろうか。この書物を泣かないで数行読めるものは，間違いなく「忠孝」を持たない人である。『心史』の「古今正統論」の論旨は，

私（楊廷樞）の考えに極めて合致する。「文丞相敘」で記される事は、史書にはっきりと記されていないところがある。また、「頸間白膏」の記述は、もっとも異質である。要するに真実いつわりのない記録であると考ええる。そもそも私（楊廷樞）は、「忠孝の至りは、神明に通ず」と聞いている。ほんとうにそれは真実であったのである。我が明の太祖洪武皇帝は、元政權を掃き出し、汚らしいのをきれいにした。こうしたことを誰が事前に知ることができるのだろうか。なのに、『心史』には「我が「久久書」は必ず大明の天下のもとで開かれるだろう」という。ほんとうに尋常でないことである。『心史』のまた、著者は、「この書物は、虚空のようなのである。天地鬼神もそむくことはない。水も湿らせることはできないし、火も燃すことはできない。絶対に壊すことはできないものである」という。いま果たして水に四百年も浸されていたのに壊れていない。その上さらに世に現れた。鄭思肖が実際にこの書物に憑りついたかのようにはなだろうか。鄭思肖は、天に昇って日星となり、鎮座して河岳となり、ただよって風雨となり、振動して雷となり、万年にわたる忠臣孝子に化して、我が国家の無窮の功績を強固にし、元を滅ぼし宋の恥を雪ぎ、晴らす事の出来ないことに報いようとしたのである。そして、この『心史』が先に出現し、われわれの文化に衝撃をあたえようとしているのである、という。

おわりに

范公柱（字は石夫。江蘇長洲人。崇禎壬午（崇禎十五年）の舉人。范仲淹の裔孫）は、書簡のやり取りをしていた楊廷樞についてつぎのように記している¹⁰⁾。

維斗（楊廷樞） 清流の望と爲る。然れども其の胸中 何ぞ嘗て清流を矜譽とせん。而して之に附す者 過〔解〕して標置（品評）されてより、遂に維斗（楊廷樞）を以て宗と爲すのみ。變に遭いて迹を山阿に匿すも、邏兵（巡邏的士兵）^{にわ}猝かに至り、之を縛りて歸る。備極（きわめてひどく）に箠楚（拷問する）し、體 完膚無し。〔しかし〕罵りて口を絶えず。其の衫襟を裂き、絶命詩十二首を血書す。〔其の詩は〕志氣浩然、迹を文文山（文天祥）に擬す。其の後に跋して曰く、「後人 我を念えば、當に忠孝なるを思うべし」と。

10) このコメントは、葉廷琯（字は紫陰、号は調生・愛棠・荅生・蛻翁・蛻廬病隱・十如老人。蘇州吳縣の人。乾隆五十七年〔一七九二〕～同治八年〔一八六九〕。廩貢生候選訓導／吳縣諸生）の『鷗陂漁話』に、記録されている。葉廷琯によると、范公柱が交際していた人たちから受け取った書簡を集めた「朋舊尺牘」十冊に記された范公柱自身の跋語であるという。

明末の范石夫孝廉の「朋舊尺牘」十冊、余（葉廷琯）友人より借り觀る。考えるに乾隆『蘇州府志』に、「〔字は〕石夫、名は公柱、長洲の人。文正公（范仲淹）の裔孫、崇禎壬午（崇禎十五年）の舉人なり。交わる所は皆な一時の名流碩德にして、後に多く大節を成す者有り」と。石夫（范公柱）諸公の尺牘の後に各々跋語を綴る。余（葉廷琯）其の遺聞逸事に涉り文獻の徵に備える可き者有るを擇び、二十餘條を摘録す。尺牘は、文 繁なれば、未だ寫出するに暇あらざるなり（同治九年〔一八七〇〕刻『鷗陂漁話』卷第四・「范石夫朋舊尺牘跋語」条・十四葉）。

刑に臨みて天を仰ぎて長嘯（大聲呼叫）し、「大明」と連呼す。即ち頭の已に落ちるも、「大」字 尙お聲の聴く可きもの有り。眞に文山（文天祥）と先後一揆するなり。昔人 謂う「商周の間、若し夷・齊の一餓無ければ、宇宙 何の氣色を成さん」と。予（范公柱） 維斗（楊廷樞）に于いて亦た云う（同治九年〔一八七〇〕刻『鷗陂漁話』卷第四・「范石夫朋舊尺牘跋語」条・十四葉～十五葉）。

楊廷樞は清流派の希望となっていた。しかし、楊廷樞の胸中は清流派を誇ったことがなかった。しかし、楊廷樞に従う者が、楊廷樞が『同文錄』で人々の八股文を批評したことからその心情を誤解してしまい、楊廷樞を祭り上げただけである。亡国に直面して、山の湾曲しているところに隠れたけれども、巡邏する兵士が突然やってきて、捕らえて連行した。ひどい拷問を加えて、体中傷だらけとなったものの、罵り続けた。上着の襟を裂いて、「絶命詩」十二首を血書した。その詩は、氣概が浩然（妨げなく廣大）として、自分を文天祥になぞらえた。そして最後に「後の人たちは、私の事を思い出すならば、忠孝を思うべきである」と記した。処刑されるにあたって、大声で叫んで、「大明」と連呼した。頭が切り離されても、まだ「大」の言葉が聞こえたものもいた。ほんとうに文天祥と軌を一にしたのである。古人が「商周の間、若し夷・齊の一餓無ければ、宇宙 何の氣色を成さん」と言ったが、楊廷樞もそのとおりである、と私（范公柱）は思う。

この范公柱の跋語は、自分を文天祥になぞらえ、明朝に対して忠節をつくした楊廷樞の生き方を適切にまとめたように思われる。

実際に、若いときに書かれた八股文の「臨大節而不可奪也」題文や「絶命辭」や「心史跋」を検討して見た結果、楊廷樞は、明朝に忠節をつくすことを信条としており、この考えは、若いときから清政権によって処刑される直前まで首尾一貫していたといえる。もっとも、八股文の「臨大節而不可奪也」題文は、後人による補筆や改変の可能性はあるが。

このように明朝に忠節をつくすことを純粹に信条とし続けることができたのは、楊廷樞が最後まで舉人であったからではないだろうか。つまり、実際の官僚の世界を知らず、「清流の望」（范公柱の跋語による）となり、自己の立場から純粹に国家に対する忠節だけを考えることができたからだ、というのは言い過ぎであろうか。

On Yang Tingshu in the Early Qing

Kunio TAKINO

Abstract

This article investigates what convictions the famous figure from Suzhou, Yang Tingshu (1595-1647), held during the late-Ming and early-Qing period. The result of this investigation shows that from his youth until he was executed by the Qing regime, he consistently maintained his conviction of loyalty to the Ming dynasty.